

令和元年度教育事業

そにっとキャンプ 旅立ちのキャンプ



1. ねらい

- ・ 体験を通して得たもの、感じたこと（進歩したこと）を再確認する。
- ・ 仲間との再会を喜び合う。
- ・ 冒険での体験をふりかえり、自己肯定感の再構築を行うとともに新たな目標をもつ。

2. 実施日

12月14日（土）～15日（日）

3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生

4. 参加者 / 募集定員

10名 / 12名

5. プログラム（要約）

全3回の最終回として、1泊2日のキャンプを実施した。今回もキャラクター「そにっと」からミッションが与えられるストーリーキャンプを行った。活動全体においては手順を書いたスケッチブックや絵カードを活用した。また、活動の前に「キャンプの約束」を全員で確認することにより、具体的な好ましい行動を示し、達成感を味わうことができたようにした。

キャンプのスケジュール

12月14日（土）

「はじまりの式」
「亀山ハイキング」
「そにリンピック」

12月15日（日）

「ウォークラリー」
「野外炊事（ちゃんこ鍋）」
「そにっとキャンプのふりかえり」
「むすびの式」

12月14日（土）

「はじまりの式」の後、今回もキャラクター「そにっと」から「亀山ハイキング」のミッションが与えられた。亀山峠に着いた参加者は、班ごとに決めたフレーズを大きな声で叫び、麓にまで声を届けることができた。その後、みんなで山頂を目指した。強風の中ではあったが、みんなで声をかけ合い、励まし合いながら歩き、山頂にたどり着いたときには、あちらこちらから歓声が上がった。

夜には「そにリンピック」を行った。班ごとにおにごっこや風船遊び、ペットボトルボウリングを楽しんだ後、参加者の提案で、全員でドッチボールを行った。ボランティアや職員も参加し、目一杯身体を動かして楽しむことができた。



12月15日（日）

ウォークラリーで館内外を巡りながら、これまでのキャンプを振り返るクイズに挑戦した後、「野外炊事（ちゃんこ鍋）」に取り組んだ。食材を洗ったり切ったり、班で協力して下準備を進め、大きな鍋で煮込んで完成した。野外炊事も3回目となり、てきぱきと進めることができていた。

午後からは、「そにっとキャンプのふりかえり」を行った。大きな紙に貼付された写真を見ながら、全3回のキャンプのふりかえりを行い、最後は全員がそにっとキャンプでの一番の思い出とこれからの目標を発表し、むすびの式では、「そにっとキャンプ修了証」とリーダーからのプレゼントが手渡され、それを手にした参加者は、笑顔で自然の家を後にした。



6. まとめ

今回のキャンプでは、これまでのキャンプを振り返ることができる場面を多く設定した。参加者は、活動の中で「チームそにっと」の仲間とともに、たくさんの「初めて」に挑戦し、クリアしてきたことを確かめ合った。また、班の仲間だけでなく他の班の仲間ともたくさんかかわる様子も多く見られ、安心して心を許せる仲間になったことを感じた。

そにっとキャンプに参加したことで、参加者同士がつながり、保護者同士がつながっていく。このようなつながりを継続できるよう、自然の家としてこれからも支援していきたい。（企画指導専門職 曾和 良友）

令和元年度教育事業 そにっとキャンプ 冒険のキャンプ

1. ねらい

- ・ 冒険的なプログラムをやり遂げることで達成感をもつ。
- ・ 協力することの大切さを実感させ、社会性を養う。
- ・ 成功体験を積み重ねる中で、自己肯定感を養う。
- ・ 保護者の交流と子育てについての意見交流をはかる。

2. 実施日

8月2日（金）～8月4日（日）2泊3日

3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生
及びその保護者

4. 参加者 / 募集定員

10名 / 12名 保護者10名

5. プログラム（要約）

全3回の第2弾として、親子での2泊3日の冒険のキャンプを実施した。今回、子どもたちは森・水の冒険に挑戦し、保護者はワークショップや野外炊事など、親子別のプログラムを実施した。

第1回の出会いのキャンプ同様に「そにっと」のキャラクターを活用し、ミッションが与えられるストーリーキャンプとした。活動全体においては手順カードを用い、子どもたちに各プログラムの流れを事前に提示し、見通しをもって行動できるようにした。また、「キャンプのやくそく」により好ましい行動を具体的に示し、達成感を味わうことができるようにした。

キャンプのスケジュール

【子どもプログラム】

8月2日（金）1日目

「はじまりの式」「丸太切り体験・木のコースター作り」「テント設営」「野外炊事」「ふりかえり」

8月3日（土）2日目

「森の冒険・アスレチック」「水の冒険・カヌー」「キャンプファイアー」「ふりかえり」

8月4日（日）3日目

「野外炊事」
「3日間のふりかえり」
「むすびの式」

【保護者プログラム】

8月2日（金）1日目

「はじまりの式」「ワークショップ」「研修」

8月3日（土）2日目

「ワークショップ」「野外炊事（子どもたちへ夕食を）」「キャンプファイアー」

8月4日（日）3日目

「ワークショップ」「3日間のふりかえり」
「むすびの式」

8月2日（金）

<子どもプログラム>



「そにっと」に招待され約2ヶ月ぶりに自然の家へ戻ってきた子どもたちは、再会を喜ぶとともに新たなミッションに期待を膨らませ、はじまりの式を迎えた。

当日は、気温が高く、熱中症の危険もあったため、山の冒険である後古光山への登山を変更し、なかよしホール軒下の日陰で「丸太切り体験と木のコースター作り」を行った。

丸太切りは班ごとに行い、班の友だちがのこぎりで切る際には、木が動かないようにしっかりと抑えたり、「もう少しで切れるよ」「うまい、うまい」と、友だちに声をかけたりするなど、出会いのキャンプの時以上に班の友だちと関わり、協力して活動することができた。丸太を切り終え、やすりで表面を平らにした後、子どもたちは、思い思いの絵を描き、記念のコースターができたとともに喜んでた。その後、宿泊するキャンプ場まで森の中の遊歩道を歩き、到着後は、キャンプリーダーに教えてもらいながら自分たちでテントを設営し、テント泊を体験した。夕食は、ランタンの灯りのもと、悪戦苦闘しながらダッチオーブンを使ったポトフ作りに挑戦した。

<保護者プログラム>

地球元気村自然学校校長の奥田博氏を講師として、プログラムを進めた。自己紹介とアイスブレイクの後、ワークショップの中では子どものことで困っていること等について情報交換をした。また、作業療法士の宮崎瑠理子氏を講師に迎え、「学齢期に大切にしたい遊びや関わり」についての研修を行った。その後は、キャンプ後の保護者同士のつながり作りに向け、奥田氏と活発な意見交流を行った。

8月3日（土）



<子どもプログラム>

「森の冒険」として、「冒険の森 in やまぞえ」に移動し、ツリートップアドベンチャーに挑戦した。とても高く足がすくむような所や足場が揺れて不安定な所など、それぞれ勇気を振り絞りながらクリアしていた。活動中には、「そこに足をかければ大丈夫だよ。」「がんばれー！あと少し」など、励ましの言葉や優しい言葉を班の友だちにかける様子が数多く見られた。

午後は「山添村 B&G 海洋センター」に移動し、「水の冒険」として班ごとにカヌーやローボート、ペダルボートにチャレンジした。初めての体験で、最初はなかなか進みづらかったのが、時間が経つにつれ、だんだんと操作にも慣れてきて時間を忘れて楽しんでいた。体験を終え、自然の家に戻ると、保護者が作ったちゃんこ鍋と子どもへの思いが込められたメッセージが準備しており、子どもたちは感謝しながら食べていた。

<保護者プログラム>

奥田氏から、以前にそにとキャンプに参加した母親が、きらり輝く子どもの様子を綴ったブログの内容や今も交流のある子どもたちのいきいき活動する様子についての話を聞くことで、自分の子どものよさに新たに気づく保護者が多くいた。終始、和やかな雰囲気の中でワークショップが行われ、保護者同士の関係がだんだんと深まっていく様子が窺えた。その後は、子どもたちのためにちゃんこ鍋をつくりながら、保護者同士の交流を深めた。夜は、子どもたちの昼の活動の様子をビデオで観るとともに、遅くまで意見交流会が行われた。

<子ども・保護者 合同プログラム>

キャンプファイヤーでは、満天の星空の下、リーダーが進行するゲームや歌で盛り上がり、歓声が森の中に響いた。最後に保護者から我が子に向けて、二日間で芽生えた思いを伝えた。



8月4日（日）

<子どもプログラム>

子どもたちは最後のミッションとして、「保護者においしいカレーを振舞う」ことに挑戦した。出会いのキャンプや1日目のポトフ作りでの経験を活かして、調理

とかまどの係に分かれて作業に取り組んだ。出来上がったカレーを食べてもらうため、テーブルにセットし、笑顔いっぱい保護者を誘いに行く子どもたちの微笑ましい姿が見られた。テーブルには、子どもたちが保護者に当てて書いた手紙が添えられており、それを見た保護者からは、自然と笑みがこぼれていた。後片付けを終え、ふりかえりをリーダーと共有した後、カードに互いの名前やメッセージを書き合い、「旅立ちのキャンプ」での再会を約束し合い帰路に就いた。解散後、キャンプの期間中、離れて過ごした我が子と会話を交わす保護者のうれしそうな笑顔が印象的であった。



<保護者プログラム>

奥田氏から、以前のそにとキャンプに参加された保護者の話を聞き、保護者会を立ち上げることの意義や、活動の方法、現状について情報交換を行った。

子どもたちが野外炊事で作ったビーフカレーが出来上がり、保護者を迎えに来た際には、子どもたちと手を取り合い、笑顔で会話する姿が見られた。子どもたちから手渡されたメッセージカードを、うれしそうに読む姿があちらこちらで見られた。

6. まとめ

今回は3回シリーズの2回目で、3日間のメインキャンプとなる。出会いのキャンプで培った「挑戦する意欲」と「仲間とのつながり」をより深め、協力して活動することの大切さや喜びを感じ取ることを目指してキャンプを企画した。森・水の冒険・テント設営・テント泊及び野外炊事をやり切り、子どもたち同士の声かけや関わりが増え、仲間意識が高まった姿が印象的であった。

今回は、保護者も参加し、親子並列型のキャンプとした。親子が別々のプログラムに取り組むことで、保護者にとっては、我が子との関係を見つめ直し、親子の絆を深める機会になった。また、保護者同士で、ワークショップや野外炊事など協働することで、子どもたち同様につながりも深まり、今後も情報交換や交流を深めていくという意識を高めていた。

12月に実施する「旅立ちのキャンプ」では子どもたちのさらなる成長を期待したい。

(企画指導専門職 曾和 良友)

令和元年度教育事業
そにととキャンプ
～出会いのキャンプ～



1. ねらい

- ・新しい仲間と出会い、親交をもつ。
- ・みんなで協力する気持ちを培う。
- ・やり遂げることの喜びを感じる。
- ・自然（光、風、水、草木）を体感する。

2. 実施日

6月1日（土）～6月2日（日）1泊2日

3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生

4. 参加者 / 募集定員

10名 / 12名

5. プログラム（要約）

「そにとと」のキャラクターを活用した、ストーリーキャンプを行った。活動全体においては手順カードや絵カードを用い、活動の流れを子どもたちに示し、見通しをもって活動できるようにした。また、「キャンプのやくそく」により具体的な行動を示し、キャンプリーダーのサポートを受けながらスモールステップで達成感を積み重ねた。

スケジュール

6月1日（土）1日目

- 「はじまりの式」
- 「そにととウォークラリー」
- 「ナイトハイク」
- 「ふりかえり」

6月2日（日）2日目

- 「野外炊事」
- 「ふりかえり」
- 「むすびの式」



6月1日（土）

「チームそにとと」として、国立曽爾青少年自然の家が集まった10人の参加者は、はじまりの式の後、風船や新聞を使ったゲームを仲間やキャンプリーダーとともに楽しんだ。

その後、「そにとと」からのミッションCDを聞き、班ごとに6か所のポイントを探しながら曽爾高原を巡る「そにととウォークラリー」に出かけた。班の仲間と協力して亀山に向かって大声で叫んだり、ポイントごとに掲示されたクイズの答えをみんなで考えたりしながら、キャンプのリーダーや友だちとの関わりを深めていった。最後のポイントでのディスクゴルフでは、一枚のディスクを班全員で順番に投げ、ルールを守ってゴールにたどり着いた。

夜は、「ナイトハイク」を行った。「そにととウォークラリー」と、ほぼ同じコースをたどったが、日中とは違い、暗闇の中を慎重に進んだ。

「そっちへ行ったら危ないよ」「離れずについて来てね」と、班の子を気遣い、互いに声をかけあう様子も見られ、参加者同士の関わりもだんだんと増えてきたことが見受けられた。



6月2日（日）

2日目のミッションとして、野外炊事で焼きそば作りを行った。各班で、カマド係と調理係に分かれて作業を進めた。出来上がった料理をスタッフが試食し、「協力」「味」「盛り付け」で審査を行った。子どもたちは、それぞれの班の良さやできばえを記した賞状とごほうびのゼリーをもらい、とてもうれしそうに賞状を眺めていた。その後、みんなで焼きそばとゼリーを食べた。

6. まとめ

一つひとつの「ミッション」を乗り越えていく過程で、だんだんと班の仲間意識が芽生え始めていった。

自分の思いが上手く言葉で表現できなかつたり、相手に伝わらなかつたりしたときに、班から離れてしまうこともあったが、ボランティアリーダーやスタッフが、子どもたちに寄り添って話を聞くことで、班での活動に戻れるようになり、まとまりが徐々に出来上がっていく感じが感じられた。次回の「冒険のキャンプ」でも、さまざまな「ミッション」をみんなで乗り越え、達成感が味わえるように、プログラムを進めたい。

（企画指導専門職 曾和 良友）